

5 近世日本における服飾の美意識（第2報）

—「いき」の美感—

お茶の水女子大 川沢 尚美

1 江戸後期における「いき」の美感の成立は、日本の服飾史上、一つのめざましい出来事であり、その伝統は私達の意識の下に今も流れている。ここでは江戸末期以来明治初期に及び風俗の変遷の中にこの一つの美感が経て来た運命をたずねて、服飾の美意識の構造を求める一手段とした。

2 江戸の市民文化を問う為には当時の小説、随筆などの文学作品が好資料となるが、殊に市民の生活を反映し又市民の生活に影響する二重の意味で歌舞伎の作品と舞台面とは研究資料として重要な意味を持つ。

3 江戸時代の後期に狹斜の巷を温床として生れた「いき」好みは初め一つの流行の定着として江戸庶民の間に育って行ったが、次第に拡大して武家階級にも及ぶようになった。いきの感覚は服飾の美感にとどまらず当時の人間の世界観を動かし、多くの抵抗にも拘らず広い世界に浸透して行ったのである。然し、やがて服飾におけるいき好みは、類型化の道を辿り本来の生命力を失ってしまった。明治に入っては、主として地方出身の官員階級に代表されるような新風俗がこの江戸伝統の好みを圧倒し、風俗としては再び局限された小世界に追いやられてしまった。然し、色彩の蔭影に敏感で露骨な派手さを避け、しかも或る華やかさの反照と自由で洒脱な動きに支えられている「いき」の美感はその後永く服飾の美意識の深処に生きながらえて来た。